

☆年間第24主日(9月17日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (シラ書 27章 30節-28章 7節)

憤りと怒り、これはひどく忌まわしい。罪人にはこの両方が付きまとう。復讐する者は、主から復讐を受ける。主はその罪を決して忘れることはない。隣人から受けた不正を赦せ。そうすれば、願い求めるとき、お前の罪は赦される。人が互いに怒りを抱き合っていないながら、どうして主からいやしを期待できようか。自分と同じ人間に憐れみをかけずにいて、どうして自分の罪の赦しを願いえようか。弱い人間にすぎない者が、憤りを抱き続けるならば、いったいだれが彼の罪を赦すことができようか。自分の最期に心を致し、敵意を捨てよ。滅びゆく定めと死とを思い、掟を守れ。掟を忘れず、隣人に対して怒りを抱くな。いと高き方の契約を忘れず、他人のおちどには寛容であれ。

答唱詩編(詩編 103 3・4、8・13、11・12)

こころをつくして神をたたえ、すべての恵みを心にとめよう。
神はわたしの罪をゆるし、痛みをいやされる。
わたしのいのちを危機から救い、いつくしみ深く祝福される。
神は恵み豊かにあわれみ深く、怒るにおそくいつくしみ深い。
父が子どもをいつくしむように、神の愛は神をおそれる人の上にある。
天が地より高いように、いつくしみは神をおそれる人の上にある。
東と西が果てしなく遠いように、神はわたしたちを罪から引き離される。

第二朗読 (使徒パウロのローマの教会への手紙 14章 7-9節)

皆さん、わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるに

しても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためです。

福音朗読（マタイによる福音書 18章 21-35節）

そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。そこで、天の国は次のようにたとえられる。

ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。決済し始めたところ、一万タラントン借金している家来が、王の前に連れて来られた。しかし、返済できなかつたので、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返しします』としきりに願った。その家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。ところが、この家来は外に出て、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会うと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。仲間はひれ伏して、『どうか待ってくれ。返すから』としきりに頼んだ。しかし、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金を返すまでと牢に入れた。仲間たちは、事の次第を見て非常に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。そこで、主君はその家来を呼びつけて言った。『不届きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかつたか。』そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に引き渡した。

あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

ようやく朝晩に暑さが減ったかなという日々が増えてきましたね。でも、金曜日のゲリラ豪雨はすさまじかったですね。私は北海道の旭川にいて、

東京に帰るために飛行機に乗ったまでは良かったのですが、すぐには飛ばず、羽田空港付近が雷雨で着陸できない状態ですのでしばらく待機しますとのアナウンスがあり、30分後に飛び立ったのですが、今度は千葉県上空で10分位の待機状態で飛び続け、ようやく着陸できても、飛び立てなかった飛行機が駐機場に溢れて、結局止まったまま1時間が過ぎ、飛行機から降りたのは予定より2時間ほど遅れていました。

今日は足立教会で「敬老の日」のお祝いがあります。昔は年を取ることが良いと言われていましたが、最近は年を取る苦勞の方が多くのように思いますね。旧約時代の先人たちも結構長生きしています。敬老の年齢に達した方々、もうちょっとの方々に健康の恵みとお幸せをお祈りいたします。

第一朗読（シラ書 27 章 30 節-28 章 7 節）

律法の書レビ記 19.18 の解説の個所と言われているところが読めます。因果応報的な意味合いが感じられます。しかしその基本には神からの赦しがいしっかりと刻まれています。人間は完全無欠ではないのでどんな人にも神に対しての落ち度があるのです。ですからそのことを念頭に置いて隣人の過ちに対応する必要があると説いています。今日の福音の朗読でのイエスの言葉、たとえ話に強く結ばれて読めるところですね。

答唱詩編（詩編 103 3・4、8・13、11・12）

答唱句で「すべての恵みを心にとめよう」と歌います。そうするならば私たちに対する神からの恵みが何ごとにおいても先行して与えられていることが感じられるのです。神は私を先に許してくださっています。だからこそ隣人への赦しができるのです。

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙 14 章 7-9 節）

「私たちは主のために生きるのです」「私たちは主のために死ぬのです」とのパウロの言葉が響きます。パウロらしい真っすぐな生き方ですね。でも私たちはパウロのようにはなかなかできないのが実情ではないでしょうか。でもそのように弱い人たちのためにもイエスは生涯をかけてこられたの

です。良く生きられては主を讃え、うまくいかなかった時には主に赦しを
請う正直な生き方が求められています。

福音朗読（マタイによる福音書 18章 21-35節）

「七の七十倍まで許せ」というイエスの言葉が当時の人々に告げられます。
きっと人々はびっくりしたでしょう。「許すにも限度がある」と考えるからです。
赦すことと愛することとは神さまの中では同義語です。たとえ話の中で主
君は家来の借金一万タラントンを帳消しにします。帳消しとは帳簿に記載
された金額を抹消することです。主君はどれだけの思いをもって家来を思
いやったかが察せられます。解説によれば「一万タラントン」とは労働者の
十数万年分の賃金とあります。今でも現実離れした途方もない金額ですが、
それほどの借金であっても許す主君、これは神の赦しを象徴しています。
イエスはこの神の愛の深さを学ぶように招くのです。



那須高原の空（2023年8月）

P.S.

「秋のバザー」の準備が本格化してきました。収益を上げることも大事で
すが、一人一人が何らかの参加を得て一致して、教会およびご近所さん、
地域の方々と顔を合わせることだと思います。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光